

あとがき

「老いさえも抽象的」なのではない、と僕は言わなければならないのかもしれない。

この抽象性の繁茂する現代において、その自己増殖するシステムの論理に身も心も貫かれて、あるときふと立ち止まり、否応なしに直面し、そして呆然と立ちすくむのが「老い」というものなのかもしれない。

僕たちはひとりひとりが、この抽象性の海のただ中で「私」となった。「私」とは、とてもリアルでかつ抽象的な現象だ。「私」たちは自らがリアルであると感じるほどに「老い」を恐怖する。「私」たちはひとりひとりが抽象的に死ななければならない存在であり、「老い」はとても生理的にそのことを告げ知らせるからだ。この抽象的な価値の空間において「老い」は徹底的に負を刻印されている。

抽象的とか具体的というのはどういうことだろうか。今の僕にはそのことについて直観的な言葉しかないのだけれども、例えば、風土的、身体的、歴史的、宗教的、慣習的なものが、互換的、断片的、客観的、技術的なものに置き換えられ、客体化され、情報化されていく過程として考えることができるだろうと思う。そして例えば農耕的な時間感覚はその風土と一体となって私の時間を刻み、私と風土とは具体的な一体だったのだけれども、抽象的数学的な時間によって刻まれる現代は、「私」を風土から切断し自由にする代わりに、「私」を風土から切断し孤独にする。

だが「老い」とか、抽象的、具体的ということについてこれ以上ここでは考えることはできない。ただ中国での旅の途上に、ふとした情景に接した瞬間に心に浮かんだ言葉だということだ・それについて考えていくことは今後の課題にしておきたいと思う。僕としてはただこれらの言葉に価値の軽重を込めてはいないということ・ことをここでコメントしておきたいだけだ。つまり、「若い」ことは「老い」よりも良いことではないし、またその逆が良いことでもな

い。「具体的」なことは「抽象的」なことより良いことでもないし、またその逆が良いことでもない。僕はただ情景に対する直観的な理解とでもいったものを正確に表したいと思っただけだ。

さて、旅は最初の離陸期の不安定な状態を通り抜けて、ある種の安定に達したかに思える。見るもの聞くものすべてが物珍しかった時期を通り抜けて、安定し、またある種の迷走をし、あるいは内省し、そして〈寂しさ〉を知る。

その〈寂しさ〉を抱えて、あるいは〈寂しさ〉の向う側へと、中国散歩はまだまだ続く。